

令和二年度

前期選抜 学力検査

国語

問題用紙

(注意事項)

- 一 放送で指示があるまでは、開いてはいけません。
- 二 答えは、全て解答用紙に書きなさい。
- 三 検査問題は、大問八題で、1ページから13ページまで印刷されています。検査開始後に、印刷のはっきりしないところや、ページが抜けているところがあれば、手を挙げなさい。
- 四 解答用紙だけ提出し、問題用紙は持ち帰りなさい。

解答上の注意

解答する際に字数制限がある場合には、「句読点や「」などの符号も字数に数えること。

聞き取り検査受検上の注意

- (1) 最初に聞き取り検査を行います。
- (2) 聞き取り検査は放送で行います。問いも放送します。放送は全て一回だけです。
- (3) 放送終了までは、3ページ以降を開いてはいけません。
- (4) 放送中に、1ページと2ページにメモをとってもかまいません。

令和1年度 前期選抜 学力検査
国語聞き取り検査放送用CD台本

(チャイム)
これから、国語の学力検査を行います。まず、問題用紙の1ページと2ページがあることを確認しますので、放送の指示に従いなさい。

(2)秒空
では、問題用紙の1ページと2ページを開きなさい。

(3)秒空

確認が終わったら、問題用紙を閉じなさい。1ページと2ページがない人は手を挙げなさい。

(1)秒空

次に、解答用紙を表にし、受験番号、氏名を書きなさい。

(2)秒空

最初聞き取り検査です。これは、放送を聞いて問いに答える検査です。問題用紙の1ページと2ページを開きなさい。

(4)秒空

これから、木曾中学校の国語の時間、佐山さんが俳句について調べてきたことを発表している場面と、それに関連した問いを四問放送します。発表は、1ページのフリントのときに、佐山さんが調べてきたことをまとめたものを、クラス全員に配り終えたところから始まります。フリントを見ながら放送を聞き、それぞれ問いに答えなさい。

(2)秒空

なれ、やりよりの途中、(全国音B)という合図のと、問いを放送します。また、(全国音B)という合図のと、場面の続きを放送します。
1ページと2ページにメモをとっても構いません。では、始めます。

(全国音A)

佐山 私は、雨まつわる俳句を調べてきました。今配ったフリントを見てください。この中で私が特に好きなのは、与謝蕪村の俳句、「春雨やゆるい下駄がす奈

鳥の宿です。修学旅行で行った奈良の奈良宮にとても似合っていて、気を取りました。

香川 はい。感想を言っていますか。

佐山 香川さん、どうも。

香川 「ゆるい下駄」というところが、ちょっとおもしろいと思ったのですが、春雨と何の関係があるのでしょうか。

佐山 ほかの言葉だった。私たの感じ方は変わるでしょうか。フリントの中で、雨の呼び名も調べ載せたので、見てください。

香川 「緑田は字からすると、新緑の季節に降る雨のかな。でも、黒田は空が暗くなるイメージがわかります。そうすると、すべての雨の名前が季節を表しているのではなそうですか。

(全国音A)

問いの① 佐山さんがフリントで紹介した雨の名前の中には、「季節以外にどのようなことからも表した呼び名があると考えられますか。最も適当なものを、選択肢A～Eのうちから1つ選び、その符号を書きなさい。

(1)秒空

(全国音B)

佐山 たたえば、夏に降る雨として夕立があげられます。種田山頭火の句と見比べてみてください。突然夕立が降ってきたとき、もしゆるい下駄を履いていたら、

(3)秒空

香川 雨留りしたくても、留けてしまっ走れないからすぶ濡れになってしまおうでしょうね。

佐山 だとすると春雨は、ほかにどんな言葉でもよいというわけではなく、そのイメージがゆるい下駄を履いて奈良の町並みを歩く作者と結びついて、俳句の情景を表していると思うのです。

(全国音A)

問いの② 佐山さんたちの会話から、与謝蕪村の句においてゆるい下駄と春雨はどのような情景を表していると考えられますか。最も適当なものを、選択肢A～Eのうちから1つ選び、その符号を書きなさい。

(1)秒空

(全国音B)

佐山 次に紹介する句は、正岡子規の「人に貸して我に奪なし春の雨」です。

香川 雨が降っているのに、傘がないことを話題にしているのが面白いですね。

佐山 「我に奪なし」といごとと、作者はどう感じているのでしょうか。ここでは春雨が読み解くことで下になる私は思います。

(全国音A)

問いの③ 佐山さんは、ここまでやりとりから、正岡子規の俳句を説明するためにどのような工夫をしていると考えられますか。最も適当なものを、選択肢A～Eのうちから1つ選び、その符号を書きなさい。

(3)秒空

(全国音B)

香川 ひと口に雨といつても、日本人はいろいろな呼び名をつけて、雨に対して豊かなイメージを持っているのですね。

(全国音A)

佐山 天気予報によると、明日は天気が下り坂で、雨が降ると予想されています。みんなは、雨が降ると行事や部活が中止になって残念がるけれど、天気予報では「天気予報が当たる」と言う表現を避ける傾向があります。プリントに載せた雨の呼び名の絵用に注目してください。絵用の「藍」は「藍愛」や「藍差」の「藍」という漢字です。ごまか……

(全国音B)

問いの④ 佐山さんが、「藍雨」という言葉を使って説明しようとしているとは何ですか。佐山さんの説明の続きの空欄に入る言葉を五字以内で書きなさい。
放送は以上です。3ページ以降も解答しなさい。

※注意 各ページの全ての問題について、解答する際に字数制限がある場合には、「句読点や」「などの符号も字数に数えること。」

これから、木野中学校の国語の時間に、佐山さんが俳句について調べてきたことを発表している場面と、それに関連した問いを四問放送します。発表は、1ページのプリントのように、佐山さんが調べてきたことをまとめたものを、クラス全員に配り終えたところから始まります。(プリント)を見ながら放送を聞き、それぞれの問いに答えなさい。

(放送が流れます。)

プリント

俳句学習 発表プリント
雨にまつわる俳句

3年 佐山 みどり

雨にまつわる俳句を集めて紹介したいと思います。



◇ 春雨やゆるい下駄かす奈良の宿

与謝蕪村

◇ 春雨や家鴨よちよち門歩き

小林一茶

◇ 人に貸して我に傘なし春の雨

正岡子規

◇ 夕立つや逃げまどふ蝶が草のなか

種田山頭火

♪ 参考資料 雨の呼び名の例

- | | | |
|------|-----|------|
| 五月雨 | 鉄砲雨 | 緑雨 |
| にわか雨 | 苞雨 | 菜種梅雨 |
| 霧雨 | 黒雨 | 夕立 |



(1) (問いを放送します。)

〔選択肢〕

- ア ことわざや伝説に基づく呼び名。
- イ 俳句や短歌と相性の良い呼び名。
- ウ 雨の降り方を表している呼び名。
- エ 降雨の領域を示している呼び名。

(2) (問いを放送します。)

〔選択肢〕

- ア 穏やかに降る雨の中をゆったりと心地よく散策をする様子。
- イ 温かな雨にぬれて歩くうちに悲しみが癒やされていく様子。
- ウ 音もなく降る雨に涙を紛らわせて人知れず泣いている様子。
- エ 雨の日に下駄をはく自分の姿におかしみを覚えていく様子。

(3) (問いを放送します。)

〔選択肢〕

- ア 人にものを貸すという動作に注目し、同じテーマを扱った句を集めることにより自分の説明に説得力を持たせようとしている。
- イ 聞き手から疑問をあげてもらい、それに対して説明を加えることで自分の調べてきたことの確かさを印象づけようとしている。
- ウ あるはずのものが無いという意外性に気づいてもらうことで、聞き手が俳句にしかない独特の表現を味わえるよう導いている。
- エ ほかの句で春雨がどのようなイメージで使われているか共有した上で、子規の句の情景を聞き手にも考えさせようとしている。

(4) (問いを放送します。)

〔佐山さんの説明の続き〕

雨の中には、雨と言えるものもあり、人によって捉え方が変わることがあります。ですから、天気予報では伝え方を工夫しているのです。

聞き取り検査終了後、3ページ以降も解答しなさい。

二 次(1)～(4)の——の漢字の読みを、ひらがなで書きなさい。

- (1) 髪飾りの映える女性。
- (2) 着物に足袋の風流ないでたち。
- (3) 大型乗器が貸与される。
- (4) 塗料が剝落する。

三 次(1)～(5)の——のカタカナの部分を選字に直して、楷書で書きなさい。

- (1) 雲が低くたれこめる。
- (2) 荒れた大地をタガヤす。
- (3) 模擬店のシュウエキを寄付した。
- (4) 会員トウロクの手続きをする。
- (5) 事件をシンショウボウタイに書き立てる。

四

次の文章は、中学生の佐藤さんが、放課後に先輩の高橋さんの家で、宿題のアドバイスしてもらっている場面の会話です。これを読み、あとの(1)～(4)の問いに答えなさい。

佐藤さん 先輩、この問題の答えは「ア」でいいですか。
 高橋さん ちよつと見せてください。違いますね。
 佐藤さん それでは「イ」でしょうか。正解は何ですか。
 高橋さん 記号だけわかってても理解したことにならないでしょう。
 佐藤さん 明日の授業で私が答えることになっているので、間違えたくないのです。
 高橋さん 私の好きな言葉に、「魚を与えれば一日は食べられる。魚の捕り方を教えれば一生食べていける。」があります。
 佐藤さん わかりました。どのように解くのかを教えてください。
 高橋さん ちよつと待つて。この問題を解くにはまず、前提としてその前の問いがわかっていることが必要なのだけではない。
 佐藤さん …。こちら間違っているみたいですね。
 高橋さん それは私が答える問題ではないのですが…。
 佐藤さん だめですよ。しつかりできるよになることは、基礎をおろそかにしません。木の長さを求める者は、必ず其の根本を固くす」というでしょう。

佐藤さん なるほど。私もできれば基礎から知りたいです。
 高橋さん その姿勢は大事ですね。では、ここまで終わらせたらお茶にしましょう。お気に入りのケーキもあるのよ。
 佐藤さん 先輩のお気に入りのケーキを食べられるとはうれしいです。頑張ります。

- (1) 文章中の [] に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。
- ア 苦しませれ
 イ その場しのぎ
 ウ 安うけあい
 エ なりゆきませ
- (2) 文章中の [] を、しつかりできるよになることとは、この関係が適切になるように書き改めなさい。
- (3) 文章中に、木の長さを求める者は、必ず其の根本を固くす。とあるが、こう読めるように、次の「求木之長者、必固其根本」とに返り点をつけなさい。
- (4) 文章中の「食べられるとは」を謙譲語を用いた表現に直し、一文節で書きなさい。

求木之長者、必固其根本。

五 次の文章を読み、あとの(1)～(5)の間に答えなさい。

今、対話とは何かと考えると、どのように説明できるでしょうか。とても簡単にいえば、「相手と話すこと」ということになるでしょう。

しかし、一方的に相手に話しかけても、その相手がこちらの言っていることに耳を傾けてくれるかどうかは、だれも保証できません。

相手の目をしっかりと見て、きちんと語りかけること、巷(まち)の話し方講座等ではこんなアドバイスがあるかもしれません。そのとき、しばしば出るのは、「思ったことを感じるままに話してはダメだ」という意見ですね。思ったことを感じるままに話すと、お互いに感情的になつてしまい、解決すべきことがなかなかうまく運ばない等々。

しかし、「思ったことを感じるままに話す」ことそれ自体が悪いことだとは、わたしは決して思いません。むしろ「思ったことを感じるままに話すべき」であると考え思うほどです。

ただ一つ、思ったことを感じるままに話すと、それがおしゃべりになつてしまうという大きな課題があります。

ここでいう「おしゃべり」とは、相手に話しているように見えながら、実際は、相手のことを考えない活動だからです。少しむずかしくいうと、他者不在の言語活動なのです。

でも、相手があつて話をしているのだから、他者不在とはいえないのではないかという質問も出そうですね。

たしかに、おしゃべりをしているときは、相手に向かつて話しかけて

はいますが、ほとんどの場合、何らかの答えや返事を求めて話しているのではなく、ただ自分の知っている情報を独りよがり話しているだけではないでしょうか。ここでは、他者としての相手の存在をほぼ無視してしゃべっているわけです。だからこそ、思ったことを感じるままに話すことには注意が必要なのです。

「あのことが、うれしい、悲しい、好きだ、嫌いだ」というように、自分の感覚や感情をそのままことばにして話していても、相手は、「へえ、そうですか」と相槌(あいま)を打つだけ。今度は相手も自分の思いを語りはじめ、それぞれに感じていることや思っていることを吐き出すと、お互いなんだかすっきりして、なんとなく満足する。こういうストレス発散の点では、おしゃべりもそれなりの効果をもっていますが、その次の段階にはなかなか進めません。

このように、いわゆるおしゃべりの多くは、かなり自己完結的な世界の話ですから、そのままでは、それ以上の発展性がないのです。その意味では、おしゃべりは、相手に向かって話しているように見えても、実際は、モノローグ(独り言)に近いわけでしょう。表面的には、ある程度、やりとりは進むように見えますが、それは、対話として成立しません。ここにモノローグであるおしゃべりとダイアログとしての対話の大きな違いがあるといえます。

ちよつと余談になりますが、カルチャーセンターの講演会や大学の講義などでも、こうしたモノローグはよく見られます。本来、聴衆や学生に語りかけているはずのだけれど、実際は、自分の関心事だけを自己満足的にとらうと話ししている、これはまさにモノローグの世界ですね。

これに対して、ダイアログとしての対話は、常に他者としての相手を想定したもののなのです。自分の言っていることが相手に伝わるか、伝わらないか、どうすれば伝わるか、なぜ伝わらないのか、そうしたことを常に考えつづけ、相手に伝えるための最大限の努力をする、その手続きのプロセスが対話にはあります。

対話成立のポイント^Bはむしろ、話題に関する他者の存在の有無なのではないかとわたしは考えます。実際のやりとり^Bに他者がいるかどうかだけではなく、話題そのものについても「他者がいる話題」と「いない話題」があるということなのです。つまり、その話題は、他者にとつてどのような意味を持つかということが対話の進展には重要だということですが、ダイアログとしての対話行為は、モノローグのおしやべりを超えて、他者存在としての相手の領域に大きく踏み込む行為なのです。

言い換えれば、一つの話題をめくつて異なる立場の他者に納得してもらうために語るという行為だともいえますし、ことばによつて他者を促し交渉を重ねながら少しずつ前にすすむという行為、すなわち、人間ならだれにでも日常生活や仕事で必要な相互関係構築のためのことばの活動だといえるでしょう。

では、このようなダイアログとしての対話によつて人は何を得ることができるのでしょうか。あるいは、今、対話について考えることは、わたしたちにとつてどのような意味を持つのでしょうか。

まずあなたは対話ということばの活動によつて相手との人間関係をつ

その人間関係は、あなたと相手の二人だけの関係ではなく、それぞれの背負っている背景とつながっています。

その背景は、それぞれがかかわっているコミュニティと深い関係があります。

相手との対話は、他者としての異なる価値観を受け止めることと同時に、コミュニティとしての社会の複数性、複雑さとともに引き受けることにつながります。

だからこそ、このような対話の活動によつて、人は社会の中で、**D**を学ぶのです。

^(注1)細川英雄『対話をデザインするー伝わるとはどういうことか』による。

(注1) 桂Ⅱ世の中。世間。

(注2) プロセスⅡ事が進んできた順序。過程。

(注3) コミュニティⅡ地域社会。共同体。

(1) 文章中に ^Aモノログであるおしゃべりとダイアログとしての対話の大きな違いとあるが、これについて次の(a)、(b)の問いに答えなさい。

(a) 「モノログであるおしゃべり」を説明したものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。
ア 感じたことをそのまま表現し、相手と感情を共有する行為。
イ 相手の反応を考慮せず、思いや考えを自分本位に語る行為。
ウ やりとりをうまく進めるために、思いついた順に話す行為。
エ 情報を正確に理解させるため、相手の目を見て述べる行為。

(b) 「ダイアログとしての対話」を説明した次の文の I、IIに入る言葉を文章中から抜き出してそれぞれ書きなさい。ただし、Iは五字、IIは十二字で抜き出すこと。

ある話題について話すとき、相手は自分とは I の他者であるから、話す者は相手に対して常に II を要することは活動のこと。

(2) 文章中に ^B話題に関する他者の存在の有無とあるが、なぜ筆者はこれを重視しているのか。その理由として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 話し手が取り上げた話題について聞き手がどの程度知っているかによって、対話の発展する度合いが大きく変化するから。
イ 思わず相手を引き込むような興味深い話題の提供が聞き手に対する礼儀であり、対話の雰囲気のよしあしを左右するから。
ウ 相手の反応を想定しながら選んだ話題である方が話し手も熱が入るので、対話が成立しているかどうかの目安になるから。
エ 主体的に関わっていない話題であることが聞き手にとって意義のあることであり、対話が進展するまいなかに関わるから。

(3) 文章中に ^C相互関係構築のためのことばの活動とあるが、これを説明したものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 人の関心をひく話題を持ち出してことばを交わし合うことで、日常生活や仕事上の人間関係を円滑にすること。
イ 自己満足的な語りで終始することなく、相手にも思いのままに語ることを促すことばが対話を進展させること。
ウ ことばのやりとりを通して相手の考えとの間に共通点や相違点を見いだして、互いの理解につなげていくこと。
エ 交渉を重ねて意見の異なる相手にも納得してもらうことで、自分の話術を使い思い通りの人間関係を築くこと。

- (4) 文章から読みとれる筆者の考えについてまとめた次の説明文を完成させなさい。ただし、I に入る言葉を自分の言葉で七字以内で書き、II は文章中から十三字で抜き出して書くこと。

対話によって相手の価値観を受け止めることは、相手とのI ことである。さらに、対話は相手がどのようなコミュニケーションとかわわっているかという背景も含め、II 行為なので、対話を通じて相互の背景とどうしが接点を持ち、相手の社会の複雑さを受け入れることになる。

- (5) 文章中のD に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。
- ア 自分の特性を省みること
 - イ 自分の人生を生きること
 - ウ 他者を促し交渉すること
 - エ 他者とともに生きること

六 次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。

下総(しもさね)河藩(かはん)の下級武士(じょうきぶし)小松尚七(こまつ しょうしち)は、いつも物事の不思議(ふしぎ)について考えてばかりで『何故(なぜ)なに尚七(しょうしち)の異名(いみな)を持つている。その学問(がくもん)への情熱(じやうねつ)を買(か)われて父(ちち)の葦兵衛(あしべゑ)と共に江戸(えど)へ上(あ)り、古河藩(こがわはん)重臣(じゆうしん)の鷹見(たかみ)十郎(じゅうら)左衛門(ざゑもん)忠常(ちゆたう)から、藩主(はんしゆ)の若君(わかしゆん)土井利位(とゐりゐ)の御学問相手(ごがくもんあて)〔共に学ぶ役目(やくめい)〕になることを持ちかけられる。

(注1)

「役料は七人扶持となる」

「七人扶持！」

親子(おやこ)が同じ顔(かほ)でびつくりする。

「不足(ふそく)か？」

(注2) 「減相(げんさう)もございません」

「むろん、すべてはそなたたちの胸(むね)三寸(さんすん)だ。いかがであらう」

それだけ告(つ)げて、忠常(ちゆたう)は待つ姿勢(しせい)をとった。

A 冷(ひや)や汗(あせ)だか脂汗(あぶらあせ)だかわからぬが、手の平(てのひら)が急に汗(あせ)ばんでくる。拭(ぬぐ)うように、膝上(ひざかみ)の袴(はかま)を握(にぎ)りしめた。迷(まよ)っているのは、忠常(ちゆたう)の申し出(しで)に、ひどく惹(ひ)かれていたからだ。

この話(わたり)を受ければいまの世(よ)では最高の学問(がくもん)を学ぶことができるのだ。身分(身分)や禄(しやく)にはこだわりはないが、新たな学問(がくもん)への誘惑(ゆうわく)には、抗(か)いがたいものがある。あの学問好き(がくもんずき)で闊達(くわんだつ)な利位(りゐ)と、そしてこの聡明(さうめい)な忠常(ちゆたう)と、一緒に勉学(めんがく)に勤(こ)しめる。友(とも)と呼(よ)ぶには身分(身分)が違い過ぎ(ちがひがすぎ)るが、それで

も何(なに)より得難(えづか)しいものに思(おも)えた。

だが、それは同時に、家族(かぞ)との別れ(わか)れを意味(いみ)する。朗(ら)らかな母(はは)と温和(温和)な妹(いもうと)、元気(げんき)な弟(あに)たちの顔(かほ)が次々(つぎつぎ)に浮(う)かんだ。四人(よに)とも、父(ちち)と自分が帰(かへ)るのを、待ち焦(こ)がれているだろう。長男(ちやうなん)が他家(たか)へ行き、江戸(えど)で出仕(でし)すると言(い)つたら、どんな顔(かほ)をするだろう。

この場(ば)でこたえを出す(だ)すには、あまりにも難(むづ)かしい思案(しあん)だった。しばしの猶子(なほこ)をくれまいかと、頼(たの)むつもりで顔を上げ(あ)げたが、一瞬(いつしゆん)早く、葦兵衛(あしべゑ)の声(こゑ)がした。

「そのお話(おはなし)、謹(こん)んでお受け(う)けたいします」

「父上(ちちじやう)……」

忠常(ちゆたう)から念(ねん)を押(お)されても、葦兵衛(あしべゑ)の横顔(よこがほ)は変(か)わらなかつた。

「よくぞ承服(じやうぷく)してくれた。悴(せが)ぬの身(み)は、この鷹見(たかみ)十郎(じゅうら)左衛門(ざゑもん)が、しかとお預(おま)かり申(ま)す」

「なにとぞよろしく、お願い(ごんげん)申し上げ(あ)げます」

B 父(ちち)の横顔(よこがほ)が、ゆつくりと平伏(へいぷく)した。

「父上(ちちじやう)、まことに良いのですか」

今夜(こんや)は、父(ちち)の旧知(きうち)の勤番(ごんぱん)者が住(す)まう長屋(ちやうや)に、泊(と)めてもらうことになつていた。長屋(ちやうや)があるという下屋敷(げあしき)に向(む)かひながら、尚七(しょうしち)は氣遣(きぢ)わしげな顔(かほ)を向(む)けた。

「良いも悪いも、七人扶持(しちにんさし)を断(た)るいわれがあるものか。おまえの扶持(さし)の七倍(ななばい)、わしの三倍(さんばい)近く(ちかく)になるのだぞ」

「……父上(ちちじやう)」

「むろん養子に行く上は、扶持米も箕輪家のもではあるが、やはり縁者に七人扶持がいるというのは、いざというとき心強い」

現金なこたえに、尚七はがつくりきたが、どうやら照れかくしであったようだ。

下屋敷は、大川を越えた深川にある。ひときわ人の多い兩國橋を渡りながら、西日が星のように照り返す川面を、兼兵衛はながめていた。

「おまえには、ずっとすまないと思っていた」

桶が終わると、ぼつりと言った。

「これほど学問の才に恵まれながら、生かしてやることができなかつた。鷹が鷹を生んだというのに、とぶ場所さえ与えてやれなんだ」

父がこのように、自分の境遇を卑下したことは、尚七が知るかぎり一度もなかった。細かなことを気にせず、大らかで前向きな姿は、兼兵衛が長年かかって身につけた処世術であったのかもしれない。伴に対し、長いあいだそんな負い目を抱えていたのかと、にわかには熱いものがこみ上げた。

「父上……私は鷹なぞではありません。私は父上と同じ鷹です。でするが、鷹に生まれたことを、誇りに思います」

そうか、と兼兵衛は顔いっぱい笑い皺を広げた。

陰影を落とす西日のためか、炭団のように黒い顔は、泣き笑いのようによがんで見えた。

(西條奈加『六花落々』による)

(注1) 七人扶持＝武士の給与。一年間で七人分食べさせることができる米や金銭。

(注2) 滅相も「ございません」でもないことでございます、の意。

(注3) 闊達＝心が広いさま。

(注4) 勤しむ＝勉強などにはげむ。

(注5) 箕輪家＝尚七が養子に入る代々医者の家。尚七は、藩主に会える身分でないで、小松家を出て、身分の高い家に養子に入る必要があった。

(注6) 鷹(とんび)＝鷹(とび)の口語的表現。

(注7) 卑下＝自分をあえて低い位置に引き下げてへりくだること。

(注8) 処世術＝世間の人とうまくつきあひながら生活していく手段。

(注9) 炭団＝炭の粉を丸めてかためた燃料。

(1) 文章中に「冷や汗だか脂汗だかわからぬが、手の平が急に汗ばんでくるとあるが、なぜ尚七はこのような状態になったのか。その理由として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 望外の役目に驚き、人生の選択が自分たちの返答にかかっていることを自覚し緊張しているから。

イ 出世話には魅力を感じたが、今の自分にとつては役不足だと思われたので返答に窮しているから。

ウ 身分ゆえに努力を評価されなかつた自分が藩に必要とされることは、とても恐れ多いことだから。

エ 自分が身につけた学問をついに江戸で試す機会が来たので、はやる気持ちを押さえきれないから。

(2) 文章中に、父の横顔が、ゆつくりと平伏したとあるが、このときの葦兵衛の様子を説明したものと最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 尚七の才能を誰よりも信じる父親として、身分は低くとも息子が軽く扱われることのないよう、言外に忠常に念を押ししている様子。

イ 息子に与えられることになる手厚い待遇に感謝しつつも、幼い子らを抱えた一家の暮らし向きは良くならないことに苦悩する様子。

ウ 尚七に口を挟ませまいと態度で示すとともに、息子を手放す大きな決断をし忠常に一切を委ねた言葉の重みをかみしめている様子。

エ 頼みの綱の長男を養子に出すことは痛手であるが、尚七がこの話に惹かれていることを察したので私情を抑えようとしている様子。

(3) 文章中に、にわかに熱いものがこみ上げたとあるが、その理由として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 父の処世術と見えたものが、実は自分が江戸に行けるよう働きかけるためのものだったと知ったから。

イ 父の隠していた思いを知らされたことで、自分の背中を押してくれる父の真情を初めて理解したから。

ウ 長男を他家の養子に出すしかない状況に対して、父がすまないという言葉をぼつりと吐き出したから。

エ 父もまた学問を志しながら長年果たせなかった夢を、今自分に託そうとしていることが分かったから。

(4) 文章中に、産に生まれたことを、誇りに思いますとあるが、このときの尚七の思いを説明した次の文の に入る言葉を、「……よりも……」という形を使って十三字以内で書きなさい。

自分自身は軽い身分に甘んじながら、 を大切に考え、送り出してくれる父の度量の大きさをありがたく思っている。

(5) 文章中の、泣き笑いのようにゆがんで見えた は尚七の視点から描かれているが、このときの尚七について述べた次の説明文を完成させなさい。ただし、 I は「場所」という言葉を使って二十五字以内で書き、 II は、あとのア～エのうちから最も適当なものを一つ選び、その符号を書くこと。

尚七が父親の表情を通して見つめているものは、自分の前に開けた将来の展望だけではない。大らかで前向きな姿の裏に、 I という負い目を抱えて生きてきた父親の II である。

- ア 人生の悲哀
イ 激しい後悔
ウ 積年の恨み
エ 強い喪失感

七 次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。

むかし難波の三位入道殿、人に、鞠を教へ給ひしを承りしに、

〔最鞠を教えなごつたのを例でうかがつたこと〕

「手持ちは如何程も聞きたるがよき」と教へられし。その次の日、又あ

〔手の構え方はどれだけでも〕

らぬ人にあひて、「鞠の手持ちやう、如何程もすわりたるよき」と

〔聞じているのがよい〕

仰せられし。是はその人の氣に対して教へかへられ侍るにや。後日に

〔おつしやつた〕

〔覚えなごつたのでしようか〕

尋ね申し侍りしかば、「その事侍り。さきの人は手がすわりたりしほど

〔尋ね申しましたこと〕

に、披げたるが本にてあると教へ、のちの人は手の披りたれば、すわ

〔本来である〕

りたるが本にてあると申せしなり。仏の衆生の氣に対して方の法を説

〔注と〕

き給へるも、みなかくのごとし。

〔このようである〕

〔筑波問答による〕

〔注一〕 難波の三位入道殿 蹴鞠の名人。

〔注二〕 衆生 此の世のあらゆる生き物。

- (1) 文章中の「教へ給ひし」を現代仮名づかに改め、全てひらがなで書きなさい。

- (2) 文章中の「あらぬ人」と同じ人物を指す別の表現を、文章中から四字で抜き出して書きなさい。

- (3) 文章中の「氣」の文脈上の意味を表すものとして、最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 才氣 イ 気骨 ウ 活気 エ 氣質

- (4) 文章中の「その事侍り」について、難波の三位入道はなぜこのようなことを言ったのか。その理由として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 何気ない自分の発言の矛盾点を指摘されて困惑したから。
 イ 筆者の発言が自分の教え方の意図に沿うものだったから。
 ウ 的外れな質問であっても誠実に対応したいと思ったから。
 エ 理解してもらうためには丁寧な説明が不可欠だったから。

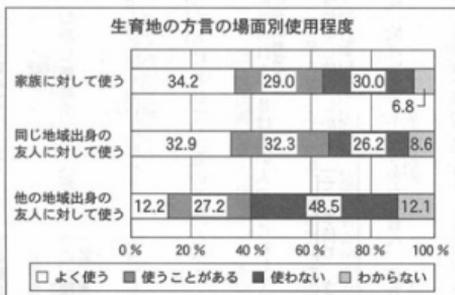
- (5) 次の文章は、中学生の久保さんが授業でこの文章を読み、みなかくのごとしに共感して記したものです。空欄に入る言葉を書きなさい。ただし、**I** はこの文章の内容に沿って十字以内で、**II** はそれによって得られる効果を十五字以上、二十字以内で書くこと。

この話のテーマは「教え方」ですが、ここで述べられていることは「教え方」に限らず、人と接するさまざまな場面で応用できるものだと思います。たとえば自分の意見を相手に伝える時も、相手に応じて **I** ことで、 **II** のではないかと考えました。

八

近年、「地方創生」がうたわれ、国内の各地域がそれぞれの特色を生かして活性化を図ることに注目が集まっています。その一環として、地域によって異なる方言を広報活動等に活用する例も見られます。しかし、もともと方言は、他の地域の出身者には意味が分かりにくいものも多いはずです。その方言を広く活用することには、どのような効果があるのでしょうか。次の【資料1】、【資料2】をふまえて、あとの【条件】にしたい、【注意事項】を守って、あなたの考えを書きなさい。

【資料1】 自分が生まれ育った地域の方言を使う場面と程度



(国立国語研究所論集 田中ゆかり、林直樹、前田忠彦、相澤正夫「1万人調査からみた最新の方言・共通語意識」[2015年全国方言意識Web調査]の報告]より作成)

【資料2】 方言の活用事例

- ・ 駅や空港などで観光地を紹介するポスターや看板
 - ・ 地域の特産品の品名や、それらを販売する商業施設の名前
 - ・ 会社やスポーツチームなどの団体名
 - ・ 自分の生育地以外の方言を使うこと
- (例「がんばれ」などのメッセージを相手の地域の方言でおくる)

【条件】

- ① 二段落構成とし、十行以内で書くこと。
 - ② 前段では、地元の人々に着目して【資料1】から読み取ったことをふまえ、方言の活用は地元の人々に対してどのような効果があると考えられるか、【資料2】の活用事例をもとにあなたの考えを書くこと。
 - ③ 後段では、他の地域の人々に着目して【資料1】から読み取ったことをふまえ、方言の活用は他の地域の人々に対してどのような効果があると考えられるか、【資料2】の活用事例をもとにあなたの考えを書くこと。
 - ④ 前段、後段とも【資料2】から選ぶ活用事例は同一のものとする。なお、どの事例を選んでも、そのこと自体が採点に影響することはありません。
- 【注意事項】
- ① 氏名や題名は書かないこと。
 - ② 原稿用紙の適切な使い方にしたがって書くこと。
- ただし、「——」などの記号を用いた訂正はしないこと。

